

第3 問題作成部会の見解

1 問題作成の方針

平成31年度の問題作成に当たっては、大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）の目的と性格及びその役割を考慮し、従来の方針や様式を継承しながら、現行の高等学校学習指導要領（以下「指導要領」という。）の範囲を踏まえた工夫を凝らし、かつ受験者の学力を適切に検出できるように配慮した。また文章表現の特質や構造を整理して理解する力、論理的判断力や思考力、総合的な読解力や感受性をバランス良く備えているかを判定できる問題とすることを目指した。

以下は、問題作成部会として特に留意した点である。

- (1) 問題は昨年と同様に4問とし、「近代以降の文章」から評論と小説を各1問、「古文」1問、「漢文」1問の構成・配列とし、200点（各50点）の配点、80分の問題とした。
- (2) 出題の範囲は、高等学校における教育課程の実施状況を踏まえて、「国語総合」「国語表現Ⅰ」の教科書レベルとし、受験者が学んだ基礎的かつ基本的な学力が反映されるように配慮した。また、各設問の難易度のバランスを考えながら、識別力のある問題となるように留意した。
- (3) 問題の構成は、高等学校の国語科教育の実態に即して、基礎的かつ基本的な学力が検出できるものとなるように配慮した。受験者の思考過程に沿った設問及び設問形式となるように設問を配列し、受験者の文章読解や思考過程の流れを妨げない問題構成となるように工夫した。難易度においても、バランスのとれた設問構成となるように考慮した。
- (4) 問題文、注記、設問、リード文及び各選択肢の吟味には細心の注意を払い、基礎的言語能力・認識力・想像力・判断力・解釈力を含む総合的な国語力を問うものとなるように工夫した。また論理的な思考力と感性的な鑑賞力、国語表現力も判断できるような問題作成に努めた。注などによって受験者の理解の一助となるような工夫も施した。

平成31年度の受験者は、昨年度より7,866人減の516,858人、平均点は16.87点上がって121.55点（得点率60.77%）であった。問題の難易度は適切であり、受験者の学力を測るという試験本来の役割は確実に果たすことができた。

2 各問題の出題意図と解答結果

問題ごとに、問題文の選定と出題意図や工夫を述べ、あわせて受験者の解答結果を踏まえた試験問題に関する考察を述べる。

第1問 沼野充義の『W文学の世紀へ—境界を越える日本語文学—』（平成13年12月15日、五柳書院）から出題。同書に所収の「翻訳をめぐる七つの非実践的な断章」より一部を抜粋した。約4500字。翻訳について、筆者の長い経験と「世界文学」の視点に基づきながら、多数の具体例を挙げて論述したものである。異なる言語の間で翻訳が可能となる「奇跡」と、「翻訳不可能性」との間に板ばさみになることを、ユーモアをまじえて語っており、高校生にも身近でなじみやすい文章である。

出題は、国語の特質に関する事項のうち常用漢字の読み書きを文脈から判断する問い、読解に関わる問い、表現と構成・展開の説明の妥当性を問う問いから構成される。評論全体の平均正答率は昨年よりやや上昇した。問1の漢字問題は正答率が高く識別力が低い問題がいくつかあった。問2～4は本文中の語句についての読解に関する問題で、問5は5人の生徒の会話から趣旨と異なるものを選ぶ問題である。問いが進むに連れて平均正答率が緩やかに下降する結

果となった。問6(i)は、表現について適切でないものを問う問題であるが、問う箇所を二つの段落に集中させた結果、平均正答率と識別力はともに高かった。

第2問 上林暁『花の精』は昭和15年9月号の『知性』に発表された短篇作品である。本文は『上林暁 傑作小説集 星を撒いた街』(夏葉社、平成23年)に拠った。いわゆる私小説と呼ばれる作品で、妻の不在から生じた空虚な思いを抱く「私」の心情が、友人との交流や月見草との関わりの中で細やかに描かれている。70年以上前の小説ではあるが、平易な表現が用いられていて、現代の若い世代にも分かりやすい文章である。

問1は、基本的な語彙・慣用表現から文脈の中の意味を問う問題である。問2は、失意の中にある妹に対する「私」の心情を問う問題である。小説の基本的な読解力を見ることを意図している。問3は、「私」とO君の関係をおさえて、その心理的機微を問う問題である。問4は、入院中の妻に対する「私」の思いや、その日、妻のことを思い出す前後の「私」の心の動きを文脈に即して理解しているかどうかを問う問題である。問5は、文章中の各所に述べられている「私」の心情を、正確に読み取っているかどうかを問う問題である。成績層に応じた得点差が生じており、適切な難易度であった。問6は、この文章の表現に関する問題である。誤答選択肢の中では、①と②を選んだ受験者が比較的多かった。これは、本文をよく読まずに、選択肢に書かれていることだけから判断していることによるものと考えられる。

第3問 『玉水物語』は、室町末期～近世初期の成立かともみられるお伽草子である。出題範囲の文章では、前半部に、狐が姫君を見初めて思い悩む姿が描かれ、後半部には、姫君に近づくために行動するさまや、実際に姫君に仕えた後の様子などが描かれている。

昨年度より長くはなったものの、出題範囲の文章は全体的に平易であり、基礎的な学力を問うセンター試験の問題文として適当であったと思われる。狐の心中に葛藤がみられること、登場人物が比較的多く、短い中にその関係の進展もみられることなどから、それらをいかした設問を心掛けた。問1は、語句解釈の問題で、基礎的な古文単語や古典文法に関する知識の定着度を測りつつ、文脈を踏まえた読解ができているかどうかを問うた。特に(i)は、後に出てくる「ばや」との対応でとらえなくてはならず、傍線部以外も丁寧に読んで判断することが必要であった。問2は、文法に関する問題で、敬語の種類や敬意の方向といった基礎的な知識の定着度を測るとともに、主体の判断をはじめとした正確な文脈理解ができているかどうかを問うた。

問3は、文脈を踏まえた心情理解の問題であるが、傍線部自体の意味をとらえる上でも基本的な古文単語や古典文法の知識が必要であった。問4は、文脈理解の問題で、娘の意図は文中に明記されているわけではないため、傍線部前後における主の女房と娘とのやりとりなどを丁寧に読み解いて判断することが必要であった。

問5と問6は、どちらも傍線部を設けず、文章全体への意識を促した問題である。問5は特に文章前半、問6は後半に関するものであり、両者をあわせて文章全体の内容理解に関する問題とした。なお、問6は和歌そのものの解釈を問うたものではないが、和歌を絡めた設問とすることを意図したものである。

平均点は昨年度に比して上がったが、各問題の識別力はおおむね高かった。そのことから、受験者の学力の差を測るのに適切なものであったといえ、文章だけではなく、各問題の難易度についてもセンター試験としては適当であったと評価できる。

第4問 唐代杜甫の墓誌銘「唐故萬年縣君京兆杜氏墓誌」の一節を題材とした。

出題に当たっては、文脈を追いかけ味読しながら解答できる設問を心掛けた。漢文知識を問うにしても、より本質的知識である①多義語と②助辞の用法を重視した上で問題作成した。こ

れは、本試験はもとより、今後も漢文を味わってゆく上で、多義語と助辞こそを大切にしていれば、正確かつ深い読解が可能となる、という意図に基づく。文字数は185字。平成30年度の187字、平成29年度の198字と比べても少なく、受験者の負担軽減を意識した。語の意味を問う問1、句型を踏まえ心情を問う問2・問3、書き下し文と解釈を問う問4、指示内容を踏まえ本文の理解を問う問5、漢文特有の修辞「典故」を踏まえ内容を問う問6、全体の主旨を踏まえて傍線部の意味を問う問7を出題した。

平均点は昨年よりも高くなった。漢文の平均点のみ現代文・古文よりも低くなりがちだったが、今年度については現代文・古文と比べても、ならした結果になった。第4問全体としては、昨年同様、得点分布に偏りなく、標準偏差も適正であり、学力を測るのに適切な問題であったと結論する。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

第1問については、問題文は平易で読みやすい文章であるが、論理的思考力や文章読解力を確認する上では適切で、学習指導要領に沿った設問がなされたと評価された。問5において、生徒どうしの話し合い場面を使って内容を問う形式については、一定の評価があったものの、誤った発言をした生徒の誤りに他の生徒が触れずにそのまま話が進行していく点については違和感があると、いっそうの工夫が求められたため、今後の課題としたい。

第2問の問題文については、人物相互の関係が捉えやすいため、受験者にとって読みやすい文章である評価された。問2は、小説読解の基本的な力を見るのに適した設問であると評価された。また、二つの観点から問うたのは新鮮であるという指摘もあった。問3は、65行目以降も解答に反映させるとよいという指摘があったが、一方、丹念に読めば正答が選べるという指摘もあった。問4は、日頃の授業における学習活動を意識した適切な設問であると評価された。問5は、人物の心情を反映した情景を読み取る力を見る良問であると評価された。また、文章全体を読ませる点で良問であると評価された。

第3問については、「国語総合」相当の文章として適当な問題文、また、普段の学習成果を見る上で適切な難易度の出題であったとの評価をいただいた。全体的に古文単語や古典文法に関する知識を踏まえた文脈理解が求められるものであったため、基礎的な学習を積んできた受験者にとってはその成果が出やすい問題であったと考えられる。なお、問題文については展開の面白さについても評価していただいた。出題範囲は続きが気になるような場面であり、また、異類物で、かつ性別の問題も関わってくるような恋愛物であるといった点などにおいて、受験者にとっても興味深い内容だったのではないかとと思われる。

第4問については、墓誌銘からの出題は初めてだったが、会話形式で展開する内容ゆえに取り組みやすかった、と好評価であった。文章量・注釈・難易度についても適切であったと好評価を得た。学界からは、「僻典（知られていない無名の出典）を避けよ」、という声がこれまで複数あがっていたが、古典中の古典「杜甫」を出題した今年度は、無理のない良問であった、という評価を得ることができた。

4 今後の問題作成に当たっての留意点又はまとめ

まず、それぞれの大問について述べ、最後に全体に関して意見を示す。

評論問題については、指導要領で多様な文章を生徒に読ませることが目指されていること、また言語活動を重視し、主体的対話的で深い学びを目指すという流れを意識して設問の工夫を行った。今後も、同様の観点から更に幅広い視点で問題文を選定しつつ、高等学校現場での教育実践に沿う

ような思考力や判断力をはかる設問を心掛けたい。

小説問題については、指導要領の目的と内容に沿って、問題文の選定に努めたい。今年度の問題は、リード文も含め、問題文の内容や表現、注、設問ともおおむね適切であった。今後も、受験者の過度な負担となることのないよう配慮しつつ、小説の基本的な読解力を問うような設問を作成し、一定の水準を確保するようにしたい。

古文の問題については、今後も問題文の難易度に留意し、受験者の読解の助けとなるリード文や注は勿論、本文中の句読点や鉤括弧、改行位置などについても、適切に整えていくことを心掛けたい。また、出題についても、時間的負担や作業コストなども意識しつつ、受験者の学習成果を的確に測れるような内容・構成となるように努めていきたい。

漢文の問題については、文脈も重視したので、句型さえ覚えれば済むと思う受験者は、戸惑ったかもしれない。今後も句型を重視してくる受験者がまだ多いはずなので、このことは配慮して問題作成すべきだろう。難易度については、妥当と評してもらえた今年度のレベルを維持したい。

本試験全体については、難度は標準であり、各大問としても、問題文の内容や表現はもちろん、設問の方向性や狙い、問うている内容などについては、基本的に適切で妥当であると考えられる。今後とも、設問の適切な難易度の維持に心掛ける一方で、教育現場に新鮮なメッセージを送り続けることの重要性を認識しながら、問題作成に臨みたい。